

奈良教育大学 国際交流留学センター主催 シンポジウム
(平成28年度学長裁量経費プロジェクト)

教員養成大学における グローバル人材育成を考える

学校教育現場における多文化化や外国語教育・異文化理解教育の変化といった社会的背景を受けて、教員養成大学における「グローバル人材」のあり方とその養成が教員養成大学にとって重要な課題となっています。そこで奈良教育大学では、昨年度に引き続き、シンポジウム「教員養成大学におけるグローバル人材を考える」を2回シリーズで開催いたします。

第1回

- 日 時 / 2017年1月7日(土) 13:30~17:00
- 会 場 / 奈良教育大学 大講義室
- 参加対象 / 本学学生・教職員・一般の方
- プログラム

実践報告①

奈良市における日本語指導が必要な児童生徒の現状

奈良市教育委員会 学校教育課教育推進係 日本語指導コーディネーター 吉村 瑞希

実践報告②

子どもたちの世界を広げる附属小学校における「言語文化」の教育実践

奈良教育大学学附属小学校教諭 林 綾
奈良教育大学 和泉元 千春・岩坂 泰子

講演

「多文化教員」に求められる資質・能力

—多様な言語文化背景の子どもたちの学びの場をデザインするために—
東京学芸大学 齋藤 ひろみ

講師紹介 齋藤 ひろみ(さいとう ひろみ)

東京学芸大学教育学部日本語教育学分野 教授
著書に「外国人児童生徒のための支援ガイドブック～子どもたちのライフコースによりて」(凡人社 2011)、「文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて」(ひつじ書房 2009)、「外国人児童生徒の学びを創る授業実践—「ことばと教科の力」を育む浜松の取り組み」(くろしお出版 2015)、「異文化間に学ぶ「ひと」の教育」(明石書店 2016)などがある

第2回

- 日 時 / 2017年2月18日(土) 13:30~17:00
- 会 場 / 奈良教育大学 大講義室
- 参加対象 / 本学学生・教職員・一般の方
- プログラム

講演

新しい教育課程と学びのイノベーション

—コンピテンシーを育む学びのデザインと教師の育成—

国立教育政策研究所 松尾 知明

実践報告①

グローバル時代の市民性を育てる教員養成

—教員志望学生と留学生の交流授業から—

東京学芸大学教育学部日本語教育学分野 准教授 南浦 涼介

実践報告②

地球市民意識の形成と道徳教育

—ボーダー(境界)を考えることから他者とのつながりを実感する実践を通して—

奈良教育大学学附属中学校教諭 小嶋 祐同郎

講師紹介 松尾 知明(まつお ともあき)

国立教育政策研究所・初等中等教育研究部・総括研究官
著書に「アメリカの現代教育革命」(東信堂 2010)、「アメリカ多文化教育の再構築」(明石書店 2007)、「多文化共生のためのテキストブック」(明石書店 2011)、「多文化教育がわかる事典」(明石書店 2013)、「多文化教育をデザインする」(勁草書房 2013)、「教育課程・方法論—コンピテンシーを育てる授業デザイン」(学文社 2014)、「21世紀型スキルとは何か—コンピテンシーに基づく教育改革の国際比較」(明石書店 2015)などがある

[お問い合わせ先] 奈良教育大学 国際交流留学センター

[参加申し込み方法] お名前・御住所・御所属を明記の上、下記アドレスまたはお電話かFAXにてお申し込みください。

E-mail / kokusai_ryugaku@nara-edu.ac.jp 電話・FAX / 0742-27-9177

[申し込み締め切り] 第1回 1月3日(火) 第2回 2月14日(火)

[後援] 奈良県教育委員会、奈良市教育委員会(申請中)

第2回シンポジウム要旨

講演

「新しい教育課程と学びのイノベーション—コンピテンシーを育む学びのデザインと教師の育成—」

国立教育政策研究所・初等中等教育研究部・総括研究官 松尾 知明

グローバル化の進展や知識基盤社会の到来に伴い、コンピテンシーが必要とされる時代になりました。変化の激しい予測の困難な社会の中で、「何かを知っているか」から、知識を活用して「何ができるか」への教育のパラダイム転換が求められています。ここで、コンピテンシーとは、知識だけではなく、スキル、さらに態度を含んだ人間の全体的な能力をいいます。技術革新が繰り返され、私たちの社会や生活が大きく変貌を遂げている中で、コンピテンシーの育成が多くの国で課題になっているのです。

日本においても、2030年の社会とその後の未来を見据えて、「次期学習指導要領に向けた審議のまとめ」（2016年8月26日）がこのたび取りまとめられました。そこでは、①生きて働く「知識・技能」、②未知の状況にも対応できる「思考力・判断力・表現力等」、③学びを人生に生かそうとする「学びに向かう力・人間性等」といった資質・能力の3つの柱の育成が中心的な課題になっています。

この講演では、なぜ、コンピテンシーの育成が求められるのか、新しい教育課程を踏まえ、コンピテンシーを育む学びをいかにデザインしていけばよいのか、そのためにこれからの教師にどのような力を育成していけばよいのか等について検討したいと思います。

実践報告①

「地球市民意識の形成と道徳教育—ボーダー（境界）を考えることから他者とのつながりを実感する実践を通して—」

奈良教育大学学附属中学校教諭 小嶋祐司郎

近年、グローバル化の進展や社会の変化に対応する資質・能力として「グローバル人材能力」や「21世紀型学力」など、さまざまな資質・能力論が展開されている。それらはみな最終的には、人間としてのよりよい生き方、すなわち道徳性の育成を求めていることはいうまでもない。しかし、グローバル化した現代社会においては、力の強い集団が、自然環境とより弱い人間という2つの方向に対して越境し、自分たちの生存の範囲を広げている。そうした決定権を持つ集団によってボーダー（境界）は移動し、移動によって支配の構造が保たれる。このような社会を他者と共に生き抜き、よりよい社会を構築する為の道徳性とはどのようなものか、そしてその育成はどうあるべきかについて、実践を通して考え、3年間のカリキュラムを構築することをねらいとして取り組んでいる。

昨年度は社会に存在するボーダー（境界）について考え、「ケアに基づく他者とのつながり」を構築しようとする子どもの育成を目指して「特別支援学級の仲間」を学習の主発点に、地域の方、福島の被災地、ホロコーストとアンネのバラなどの学習に取り組んだ。

本年度は、来年度（最終学年）を見すえ、他者と共に明日を語り、創ろうとする意欲や態度、私と他者を分けるのではなくつなぐものは何か、について考えることをめざして授業づくり取り組んでいる。

実践報告②

「教員志望学生と留学生が共に学ぶことは何をえられるか：未来をつくる教育の担い手をめざして」

東京学芸大学教育学部日本語教育学分野 准教授 南浦涼介

2012年から2015年まで、山口大学で私は留学生センターの教員と共同で、社会科教員志望学生と留学生の合同授業を実施してきました。現代社会の諸問題を議論しながら、市民性の観点を学生たちが獲得していくことをねらった実践でした。4年間をとおしてみれば、成功したものもありますし、一方で不成功に終わったものもあります。学生たちは共同学習の中で何を学びとったのでしょうか。グローバル人材の育成、異文化間能力の形成など、「新しい能力」の養成が重要視される現代の教員養成の観点から、実践の意義と課題について話したいと思います。

第1回シンポジウム要旨

講演

「多文化教員」に求められる資質・能力

—多様な言語文化背景の子どもたちの学びの場をデザインするために—

東京学芸大学 齋藤ひろみ

グローバル化にともない社会が多様化する中、私たちは多様な言語文化背景をもつ人々とともに学び・暮らしています。文化の交差する場で編み出される新たな意味や価値に心弾ませることも多いのではないのでしょうか。では、教室に外国の子どもたちがいるとき、コミュニケーションの問題や文化・考え方の違いに対し、学校はどう対応すればよいのでしょうか。また、その子どもたちが社会参加する力を育むためには、教員はどのような学校環境を創ることが求められるのでしょうか。学校の多文化化に対応できる教員を「多文化教員」と呼び、その教員に期待される資質能力とは何かについて、現場の実際の状況やアンケート調査の結果などをもとに議論します。

実践報告①

「奈良市における日本語指導が必要な児童生徒の現状」

奈良市教育委員会 学校教育課教育推進係

日本語指導コーディネーター 吉村瑞希

奈良市においても、日本語指導が必要な児童生徒の数は年々増加をしています。日本語が話せずに不安を抱える子ども、日本語が話せるように「見える」けれども学力が身につかない子どもの姿を、言語・文化・アイデンティティの側面からお伝えしたいと思います。文化・アイデンティティについては事例をもとに、言語については日本語能力測定（DLA・PVT-R）の結果を踏まえた特徴をもとにご報告させていただければと思います。

実践報告②

「子どもたちの世界を広げる附属小学校における「言語文化」の教育実践」

附属小学校教諭 林綾

国際交流留学センター 和泉元千春

英語教育講座 岩坂泰子

奈教大附属小学校では、5年次・6年次の児童を対象とした「言語文化」という独自の活動を大学との協働により行っています。この活動は「日本と外国の言語と文化について理解を深める時間」で、子どもの認識や発達段階を考慮してデザインされています。これまでに実践したいくつかの活動には本学の大学生（日本人学生と留学生）が協働で関わっており、その協働の活動を通して、児童、大学生は異なる文化・言語が出会う場を体験し多くの気づきや学びを得ていました。本報告では、いくつかの活動（大学生との交流会、ハングル文字のルール発見）と、参加者の振り返りコメントを紹介します。なお、本実践は、外国ルーツの児童生徒を直接支援することを目的としたものではありませんが、すべての人が多文化社会の構成員として存在するための基盤となる学びを得る場の事例として紹介したいと思います。